

## 意味の擴延方向並にその悲劇性

中 井 正 一

カントが彼の先驗的論理學によつて、アリストテレスの名に於ける形式主義を克服せんとする運動の導火線をあたへながら、しかも彼の先驗的分析論の企圖の「手引」をその當の形式主義に取り、大部分その文法的見地によつて分類されたる範疇表を彼が範疇表に適用せし事は充分に反對さるべき理由があつた。近世の否定判斷に對する論争は殆んどこの範疇としての否定判斷への反省に基いてゐた。

フイヒテの知識學よりヘーゲルの論理學に至る同一哲學一般の形而上學的否定論は正しくその急がれたる修正であり、近世論理學は又その形而上學的考察への再反省をなさなければならなかつた。

シグワルト、ロツチエに於ける如き、否定は肯定判斷の拒否であると云ふ意味に於いて、第二の判斷であると云ふ二重判斷說、ウインデルバンド、リツケルトに於ける如き、否定の前に先づ問があり、その評價的解答としての二次的評價說、更にブレターノ、フォルトラーグの愛憎に關聯すると考へる衝動としての否定論等々が即それである。

ライナツハは「確信」*Überzeugung* と「主張」*Behauptung* の二つの領域に判斷構造を分つて同意的是認 *Zustimmungserkennung* と、判斷的是認 *urteilende Anerkennung* を區別する。同意的是認は判斷的是認の是認である。かくして否定も「確信」の領域の否定と、「主張」に對する同意の領域

の否定が分れるべきであると考へる。この事は従来の否定論に比して大きな一つの飛躍をなしてゐると考へらるべきであらう。即それは判断構造の上に於いて意味の充足的作用 *erfüllende Akt* の外に意味の擴延的方向の存在への注意である。

フンボルトの云ふ意味の言語活動に於ける内的言語形式と外的言語形式、ソツシユールの云ふ意味に於ける發言型態と聽取型態との言語構造はかくして特殊なる意味構成の上の役割を演ずるかの様である。

それは即、シグワルト、ウインデルバンドで擬人的に二重づけられたる否定判断の構造は、寧ろ實にその内面に、自我の内面なる聽取者、自我の外面なる聽取者、即その意味の二つの分離、二つの疎隔を意味するのではあるまいか、と云ふ問をこゝに提出せしめるものがある。換言すればヘーゲルの *Dialektik* の否定の背後にゾルゲルのロマ

ン派的イロニーを感じると共にギリシヤに於ける辯論の激しい取組みとしての *dialektik* を想起せしめるのである。そして内なる言葉としての確信の最も深き内底に畏るべき存在として、分離されたる自我即「自分」が涯なき無關心性をもつて黙してゐるのではあるまいか、と云ふ惡寒に似たる疑を惹起せしめるものがあると同時に、外なる言葉としての主張の彼方に、亦更に永遠に聽く否定者、所謂「他人」があり、言葉はこの「二つの孤獨」の中に、その意味の「問」の中に立つのではあるまいか。

この内なる言葉即思惟としての意味領域はそれは意味の充足的作用であり、對象的論理構成への方向である。これに反して、外なる言葉即主張としての意味領域は、意味の充足方向への、充足不足は別として、一つの確信をそれと同一意味をもつて他に確信を要求するの方向である。人が一度發言したことはいかに謙遜であつてもやはり對

手の承認を要求してゐる。その場合の命題に於ける「ある」は論理的エレメントであるSとPを復合せしめる連辭ではなくして、寧ろ社會的エレメントであるAとBを復合せしめるモメントであることと成る、例へばこゝに嘘言の構造を願れば、或人が「SはPである」と確信せざる場合、しかも「SはPである」と主張する場合、即それが嘘言である。同一命題が、意味充足方向を指す場合と、意味擴延方向を指す場合とが發言作用と聽取作用の何れにも、その方向を異にして内在する。それが同一であるか、否か、そこに嘘言の構造がある。かゝる意味で「SはPである」の命題が意味の擴延方向を指すとは、それが他の人の人の關心に於いて同方向への意味充足を豫想して手渡すことである。こゝに一つの例をとるとするならばラグビー球戯に於いて、發言と聽取の兩型態を二つの對立するチームと考へ、常にゴールを志向する球を意

味の志向性とするならば、競技者によつてゴールに運ばるゝ球は即意味の充足作用であり、その方向と直角にパスして他の競技者に球を渡すこと、そして彼をして、更にゴールに突進ましむること、そこに即意味の擴延方向に於ける作用がある。

凡ての藝術に於いて、所謂發表の意味は即それである。我と我を凝視する「自分」の眼の前に無限に省み行く充足的方向は意味の質的深化である。その作品を「他人」の眼の前に提出する擴延的方向は意味の量的展開である。一つは自我の内面に於ける、一つは社會の内面に於ける藝術的意味の構造である。

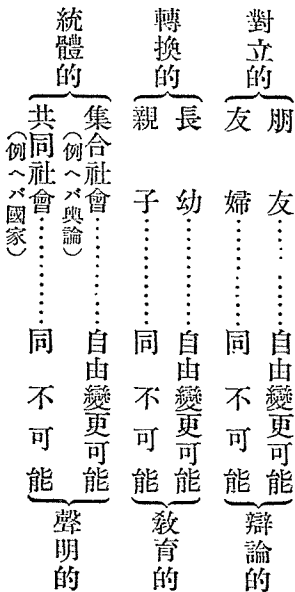
ライナツハは他人に了解されたいき要求をもつて社會的構造の絶對的本質と呼んでゐるけれども、そこには一脈の心理的考へ方が残つてゐる。むしろ私達は「意味の量的構成」として、社會的構造を考察すべきであらう。そして論理も藝術も、その

意味の構成の一端を凡てこの社會的構造、即「意味の量」の中に浸してゐると考へるべきであらう。かく考へる事で始めて、社會的構造はその心理性より脱して、象徴的構造を持つと云ふべきであらう。

かくして、確信と主張、内なる言葉と外なる言葉、この二領域に於ける意味の分析によつて、意味の充足方向の外に、もう一つの方向即擴張の作用があると私は考へたい。そしてそれでのみ、思辨的と歴史的、テオリとプラクシス、Dialektikと辯證と *dialectic*、辯證の二領域を相浸すべからざる二領域として區別し得ると信ずる。たとひ數學の公式にしても、主張の立場では、すでに了解の容易を目圖するところの技術に關聯をもつ以上それはプラクシスであり、又たとひプロバガンタであらうとも、それが確信を豫想する以上それはテオリでもあり得る。

もしこの意味の擴張方向が許容さるゝならば、私はこの擴張性の構造について、その考察を進めて見たい。

意味の擴張方向はそれと直角的に交はる充足方向に於ける區別によつて大體六つの類型に分たれると思ふ。それは即、了解能力の可能性、換言すれば意味充足の追求能力の比較に於いて、同等である場合と、差異ある場合と、その何れでも有得る場合に分れる。第一なるものを對立的、第二を轉換的、第三を統體的と名づけ得るとするならば次の如き構造が可能であらう。



意味の擴張方向並にその悲劇性

バイイの指摘する如き言語のもつ社會的拘束は即この各々の領域に於いて見る如き同一意味の異なる表現性にあらはれる。

かゝる意味で言語構成は三つの意味の分離性即疎隔をもつ。即第一は「自分」への疎隔である。思ふ事の云へざる。云ふことの思へざるの嘆きである。第二は「他人」への疎隔である。友に對し、親に對し、輿論に對して、自らは決してさながらに受取られる事はない。第三は自らの友への關係と自らの親との關係に於いて、その何れをも同時に愛し得ざる場合が可能である。即領域相互の疎隔である。

言語構成がかゝる構造をもち、かゝる疎隔をもつことは深い興味を文學の構成の上にもたらすことと成る。

ケーラー、スツンプ等による言語學の最近の研究が示す様に、母音及子音の態型が色彩態型と並

列的に考察されることは、フィシヤー、ハルトマン、フォルケルトによつて、はじめにも單なる傳達器 *Vehikel* とされたる言語をして、それが單なる壺であつたのではなくして、酒でもあつた事を知らしめるのである。

この言語の色彩性の研究はその空間性の研究と相俟つて深い興味を引くものがある。すでにフンボルトの内的言語形式と外的言語形式、ソツシユールの發言型態と聽取型態の二つの軸は即言語それ自身の中にある「言葉の方向」を示すかの様である。同一命題「SはPである」を、云ふ場合と聽く場合は、言葉自身がその方向性の中に動く、思惟する場合と、主張する場合に於いても亦異つた意味でさうである。そして、その軸よりあらはるゝ言語構成の疎隔性は、あだかも空間のもつ緊張性シユパンツングのその如き、言語意味構成に於ける擴延方向の領域の緊張性がそこに成立する。社會構造の悲劇

性が即それである。

かくの如く考へるならば、これまで文學の内容と云はれしものゝ一部即社會的關係の所謂文藝的なるものは、實はやはり言語構成の性格カラキテルとしての空間性 *Räumlichkeit* であり、社會構造としての、即ち他の領域の形式であることを知るのである。一つの領域の形式性に射影されたる、即換算されたる他の領域の形式性、即それが内容である。こゝで私達は形式の概念が餘りにも、主觀及客觀の考へ方に常につきまどへる形式及内容の考へ方にそれが依り過ぎるのを見るのである。寧ろ文學の形式の考へ方は構成の領域性の中に吸収され、分解さるべきであらう。

かゝる考へ方に於いては、所謂空間性は三つのエレメントをもてる一つのフンクチオンにしかすぎなくなる。その意味で言語は内外、云ふ聴く、並にその領域相互の關係に於ける三つの疎隔性の

中に各特殊なる方向と構造をもつことに於いて、一つのフンクチオンとして、空間的複合をもつと考へ得る。換言すれば、思ふことの云へざる、云ふことの思へざる疎隔領域と、云ふことの聴かれざる、聴かんとすることの云はれざる疎隔領域と並に朋友領域の了解と、夫婦領域の了解との兩立せざる、夫婦領域の了解と、親子領域の了解の兩立せざる等々の領域相互の争鬭性、それ等の疎隔性の中に言語空間の構造が成立する。その何れの方向にもつきまどふ所の「意味の充足方向」への肉迫、その意味の課せられたる荷負性は寧ろハイデッカーの指摘せる如く時間的疎隔と云ふべきであらう。

言語の色彩性がケーラー、スツンプによつて問題として提出され、その空間性がフンボルト、ンツシユール、ライナツハによつて提出されてゐる事は、文學の構成にとつて、實に深い興味である

と共に、殊にその形式性の云々さるゝ現代にとつて、特に注意さるべきであらう。

繪畫が三次限の空間を二次限のカンパスに色彩をもつて換算するのは何を意味するか。カンパスの二次限性は物理空間を「見ること」のもつ一組織の上に射影することである。見ることの一つの方向と距離と範圍を決定することである。しかし、只見ることでは所謂自然美が意味するところの「自然の技巧」Technik der Natur への端的なる反省にすぎない。しかし、その見ること自身がすでに身體の生理的現象である以上、それはすでに「内なる自然の技巧」とも云ふべき、内的自然即生理現象に自然の構成は關聯を持ち來る。カントが生物の肉體構造の目的性を論ずる以上、そしてそれがすでに自然の技巧である以上、人間の生理的現象の合目的性への信頼があるべきであらう。もし彼がニーチェが非難せし如く、彼が創作的立場の

藝術的現象を今少し注意したならば、この自然美を人間がその肉體的構成の中に換算し、その中にその技術そのもの、熟達老成するところの藝術行為を深く省みただであらう。即藝術美とは「自然の技巧」を人間の内なる「自然の技巧」の中に射影することである。自然が人間の中に汗ばむことである。自然が自然己自らを自らの中に省ることである。自然美と藝術美の差は、「血をもつて構成せる自然の技巧」「呼吸によつて構成せる自然の技巧」を、それが通過せるか否かにある。即全自然が人間の中に息づいたか否かにある。しかも「視ること」それがすでに生理的現象である以上、自然美は藝術美の遞減的極限概念として示標づけられる。かくて「見ること」が筋肉操作の「描くこと」に轉ずる場合、種々なる構造をもつであらう。もし「見ること」に於いて、その方向距離範圍の決定があるならば、それはその三つのエレメントを

設定するところの一つの面、即キャンパスを位置づけるであらう。この意味でキャンパスの二次限性は人間の内的技巧に換算する場合の立場の設定の意味に於ける構成體である。そして繪具は可能的色彩性の自由變更的領域に於いてある。かくて描くことは立場即方向距離範圍のエLEMENTの復合である構成體の上に色彩性をして、不自由變更的決定をなすことである。もしこの方向距離範圍の位置決定の無限連續的變異を許容するならば、そこに彫刻に於ける位置の自由性をもつであらう。立場そのものが繪畫に於ける如く定めらるゝことなく、方向、距離範圍に於いて無限に自由に變化し得る。かくて彫刻作品の在るところの三次限性は單なる物理的空間ではなくして、藝術的空間として見る立場の構成體である。即陳列場と彫像とは決して同じ空間には居ない。

あたかもその如く、文學に於いても、小説家が

意味の擴張方向並にその悲劇性

言語構造の空間性即悲劇性を取扱ふ場合やはり、書く立場即その意味でバイイの云ふ文學語の領域にそふは射影され始める。文學は言語空間性を、更に「云ふ」或は「聽く」ところの構成體の上に射影する。例へば「甘い」と云はれた」「甘い」と云つた」「甘い」と云ひなすつた」「甘い」と云やがつた」「甘い」とほざいた」の如く同じ「甘い」と云ふ言葉を聽くにあたつて無限に多くの立場があるにもかゝらず、小説は一つの立場で全體のキャンパスを塗らなければならぬ。ところが戯曲では、そこで只「甘い」とだけ云はず。そしてその聽く立場を自分もすでに無限に多く持つと同様に、又觀客の無限に委ねる。そこに戯曲は小説よりも聽くことに於いてその立場の可變性の要素を加へること、あたかもキャンパスより彫像に變ずる場合の關係にある。そして視覺に於いて物理的な色彩と空間を藝術的視覺の色彩性と働ける空間性に換算する如く、言



語に於いても言語構成の色彩性と空間性を藝術的言語の色彩性と働ける空間性に換算する。視覺的物理と美術とが相對する如く、言語構成と文學とが相對する。

かくて、視覺的物理空間性と美術的空間性之間に大なる飛躍がある如く、言語構成の空間性と文學的構成の間には大なる飛躍がある。この飛躍性はすでに意味の擴延方向に於ける疎隔性の構造そのものを對象として、その疎隔性の意味そのものを充足性方向へ再び還元するの作用である。一々の言語意味の充足性の方向よりその擴延性の方向に轉じたる作用は、その作用の内面なる疎隔的構造そのものを再び藝術的意味の充足方向に於いて促へる。悲劇性そのものゝ諦視、そこに深き「見ること」の意味がある。藝術の創作行爲はそこで特殊なる充足行爲をもつ。この擴延方向のより高き充足行爲への轉換、こゝに創作領域に於けるカタル

シスの意味がある。それは空間構成的疎隔方向とは直角の方向へ新しき疎隔性が出現することである。悲劇はより深い悲劇性即創作の苦惱へその面をむける。それはより深い「自分」即存在への肉迫である。より深い時の出現である。この創作が更にその完成とゞもに再び發表に轉ずる時、即この藝術的充足性より再び藝術的擴延性に轉ずる場合、それは先の擴延層よりも深い層性に於ける意味の擴延作用でなければならぬ。創作が觀照者に面する孤獨性、その悲劇性は單なる言葉の浸み透らざる嘆きにはるかにも勝るの寂寥でなければならぬ。かくして意味の充足と擴延のヒエラルカイヤはその限なき梯子を昇り行く。

ライブニッツが指摘せる如く、最も完全なる神にとつて、只一つ缺くるところのもの望まらるべきものはその子人間によつて愛せらるることである。十全なる充足者によつても、その十全性が人間に

受入れらるゝ事はその十全性の外にある。そこに悪魔の祕密がある。佛を疑ふ人間の疑惑、それは人の意業の外、佛がその消滅すべき罪の外にある。そこに全存在の祕密とその罰、深き悲劇性が潜んでゐる。(完)

## 新刊紹介

日本庶民教育史 全三巻 乙竹岩造氏著

東京文理科大学教授乙竹岩造氏は教育學プロパーの學者としては今更こゝに紹介するまでもなく、既に學界に確乎不拔の位置を持つて居られる方であるが、同時に日本教育史にも興味を有し、二十年來孜々として、その方面殊に庶民教育の沿革を研究して居られた。何故か從來その研究の成果を秘して殆ど發表されなかつたので、日本教育史の研究家たることは、あまり世間に知れなかつたが、教授が着々として研究の業を積まれた金玉の成稿を發表されるのを一部の學徒は鶴首して待つてゐたものであつた。

機到り、昨年九月になつて公表された。全三巻、合せて約三千二百頁の大冊である。今その大綱を擧げるに共に感想を附記して紹介の辭に代へたいと思ふのである。

第一編は「庶民教育の母胎」題してある。特に其の第一章に於て著者の本書に於ける企圖の梗概を掲げてあるが、これは讀者に取つて便利であるを考へられる。第二章から以下、庶民教育を生むに到つた母胎として數ふべき、庶民の發達とその經濟生活の向上、文教の維持者